

## 三重大学COEプロジェクト研究報告書

区 分	<input type="checkbox"/> 世界に誇れる世界トップレベルの研究拠点 (旧COE-A) <input checked="" type="checkbox"/> 学部として育てたい国内トップレベルの研究 (旧COE-B)
研究 題目	感性システムの構造化とそれを基盤としたアクションリサーチ的アプローチの可能性の探求 —「感じる力」を培う教育モデルの開発にむけて—
研究代表者	根津知佳子
<p><b>研究の目的等</b></p> <p><b>はじめに</b></p> <p>近年、我が国の教員養成学部では、実践力を育成するために現場での経験を重視する傾向にあるが、経験の質や系統性に関する理論的研究は少ない。実践力を育むためには、現場での経験と理論的な学びとの往還が不可欠であり、それを具現化する教育モデルの開発が急務となっている。</p> <p>教育実践をとりまく現場は、教育および福祉・医療・心理臨床など隣接関連領域に限らず、企業や地域自治体等も含まれる。対象は人間だけではないため、専門領域の異なる研究者同士が、解釈が拡散する危険を孕んだ概念について論議をするとき、様々な不整合が起こりうる。とりわけ、教育目標に関わるキーワード（感じる力・感性など）に関して合意を形成するためには丁寧な対話が必要であり、相互理解を円滑にするためのツールの開発も求められている。</p> <p><b>① 目的</b></p> <p>本プロジェクトの第一の目的は、教育実践における感性のフレームワークを考案し、工学領域における感性システムのフレームワークとの相違を明確にすることである。</p> <p>第二の目的は、研究と実践の有機的連携を重視するアクションリサーチ(Action Research)を展開し、「感じる力」を培うための教育モデルを開発することである。特に、三重大学が推進しているPBL教育とアクションリサーチを融合させ、いくつかの教育モデル(教員養成型PBL:アクションリサーチ的アプローチ)を創出する。</p> <p><b>② 特色</b></p> <p>本プロジェクトでは、感性を「価値判断に向かう方向性、能動性を持った総合的な働き」と規定する。そして、感性が「感じる力」の基盤であり、それらは理論に裏付けされた実践を通して培われるものと考えている。さらに、「感じる力」のうち「問題発見能力」「動機づけ」という側面に関して、客観的に評価する方法の開発に着手した点に特色がある。</p> <p>本プロジェクトの第二の特色は、PBLチュートリアル教育におけるチューター制度に着目し、アクションリサーチと融合させ、大学教育の方法論として提唱する点にある。教育学部では、初期の段階から現場と触れあい、そこで何が問題になっているかを発見することが求められる。教育実践においては、人間の内面の問題や成長・発達など多様な情報や要因を視野にいれる必要があるため、テーマに深くかかわればかかわるほど、学生の自立性が高まると同時に、大学教員の役割や責任も重要になる。</p> <p>本プロジェクトにおいては、本質を医学部のPBL教育から受け継ぎながらも教員養成の特色に対応するため多様なモデルの創出と「経験＝省察」の方法開発・改善に重点をおく。具体的には、教員と学生が共に実践現場に入り、具体的・現実的課題を対象として協働する研究スタイル(アクションリサーチ)とPBLチュートリアル教育との融合を試みる。アクションリサーチとPBLチュートリアル教育は、研究と教育という次元の異なる分野であるが、両者は、問題を発見・確定し、解決をはかることを目的とする点において極めて強い共通性を持っている。</p>	

ところで、教育学部のカリキュラムの特徴は、各コースの専門科目群（「教職専門に関する科目」「教科教育に関する科目」「教科専門に関する科目」と実践的指導力を培う「実践的な科目群（2006年度よりコア科目群）」が有機的な構造を成していることである。本プロジェクトは、「実践的な科目群」の開発に深く関与するため、隣接関連領域（心理・福祉・医学）の専門的知識が必要とされた。そこで、以下の10人のメンバーで研究を推進した。

根津知佳子（音楽科教育・芸術（音楽）療法）	森脇健夫（教育方法学）
廣岡秀一（社会心理学）	中西良文（学習心理学・教育心理学）
滝口圭子（幼児教育・認知心理学）	岡田珠江（臨床心理学）
大谷正人（精神医学）	荒尾岳児（美学・作曲）
松岡 守（技術教育・電気工学）	松本金矢（技術教育・機械工学）

本プロジェクトで創出した実践・活動が教育学部の「実践的な科目群（コア科目群）」の一部に位置づけられるとともに、教科教育や感性に関する専門的知識が必要となったため、2007年度よりメンバーを加えて12人で活動を展開し、研究分担の見直しも行った。

根津知佳子（実践モデルの開発）	中西良文（評価方法の開発）
森脇健夫（アクションリサーチの推進）	松本金矢（PBL教育）
滝口圭子（実地研究における学生の姿容）	岡田珠江（授業実践の開発）
松岡 守（ものづくり教育）	大谷正人（精神医学）
秋元ひろと（感性）	山田康彦（芸術と感性）
上山 浩（美術教育における感性）	荒尾浩子（英語教育における感性）

### ③ 重要性・発展性

本プロジェクトが創出した活動（2004-2008年度）において蓄積されたポートフォリオ、エピソード記述は、学部から貸与された研究室で保管している。特に、2005年度から開始した活動では、現在の大学院生および4年生の学びの履歴が蓄積されている。これは、職業的アイデンティティの獲得をめぐる縦断的な基礎データであり、これらと比較することによって、学年やコース別の横断的な様相を把握することも可能である。

本研究で現在までに開発・試行している評価方法については、学会などで発表し審査も受けているため、適用の準備が整っている。また、現在まとめている卒業生や修士生による自己評価や関係者による他者評価などにより、本プロジェクトで創出した活動における経験の固有性を明らかにできる。これらの資料によって、2010年度からスタートする「教職実践演習」を含む教育課程における評価システムの開発の準備が整うことになる。

本プロジェクトの目的のひとつである教育実践における感性を構造化する試みは、領域ごとに多様な定義がなされている感性について、教育の視点から捉え、専門領域の異なる研究者が同じテーブルで議論ができる基盤を築こうとするものであり、今後の感性研究の発展につながるものであると考える。

### ④ 学術的・社会的意義など

「感じる力」は、本学の教育目標である「4つの力」のひとつであり、「豊かな感性・気づき」「高い倫理性」「強いモチベーション」「学ぶ喜び」と規定されている。それらと文部科学省の提唱する「学士力」との関係については検討が進んでいるが、前述したように、本プロジェクトでは、「価値判断に向かう方向性、能動性を持った総合的な働き」が「感じる力」の基盤であり、実践を通して培われるものと捉えている。特に、評価方法の開発に関しては、「感じる力」のうち「問題発見能力」「動機づけ」という側面に

焦点をあててきた。

同時に、感性工学領域では発達的な視点をもった研究が少ないことから、「感じる力」の多様性・個別性といった、感性の豊穡さを大切にするという視座と、生命はもとより情報の管理などにおける倫理性を学会等に還元してきた。このような論議に学生も加わることによって、「4つの力」のうちの「豊かな感性」や「気づき」「高い倫理性」を育むことができると考える。

本プロジェクトで展開するアクションリサーチは、実践現場における問題を対象にし、実践者と研究者が協働して問題の解決を図る研究方法である。学生は現場固有の問題解決に参加することにより、三重大学だけではなく、学生自身が地域や国際的に求められていることに気づく機会を得るものと考え。

コミュニケーション能力、小規模特認校の特性、人権、学力低下、特別支援などは、昨今の我が国の教育現場が抱える共通問題であるが、地域性、学校文化、学級文化などの要因が組み合わせられることにより、より一層複雑になっている場合も少なくない。こういった現場固有の問題について教員と学生がチームを組むことにより、「学びの場＝大学」の質的向上も図ることができる。そして、それは同時に地域社会への貢献へと結びついている。それが、アクションリサーチ的アプローチを取り入れる意義といえよう。

本プロジェクトにおける成果を学生自身が他大学や諸外国に発信することは、自らの体験の普遍性と特殊性に気付く機会となる。他大学とのシンポジウムやポスターセッションによる交流がその役割を果たしている。

## 研究の成果等

### ① 当初目的に対する成果

本プロジェクトの当初目的に掲げた以下の3点に分けて報告する。

1. 感性システムの構造化
  - 1-a. 教育実践におけるオリジナルのフレームワークの考案
  - 1-b. 感性工学におけるフレームワークとの対比による教育実践で重視すべき観点の明確化
2. 感性の評価・測定
  - 2-a. フレームワークのツールとしての有効性
  - 2-b. 記録の蓄積
  - 2-c. 評価方法の開発
3. 現場と協働する方法論の研究
  - 3-a. アクションリサーチ的アプローチの可能性の明確化
  - 3-b. 「感じる力」を培うための教育モデル・システムの開発

#### 【1. 感性システムの構造化】

##### 1-a. 教育実践におけるオリジナルのフレームワークの考案

感性工学領域では、感性を暗黙知（入力）を形式知（出力）に変換するシステム（系）と捉えている（図1）。すなわち、人間のひとつの機能（function）としての感性を抽出し、人工的な感性を創出することで、より人間に近い工学の実現を目指している。

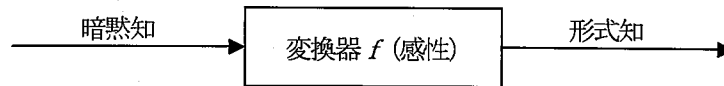


図1 感性工学における変換器としての感性

椎塚久雄らは、感性をこのような変換システムとして捉えるために、変換器の構造化を試み、感性のフレームワークを提案している。

教育実践においては、対象者が「感受したコト」を音声・文字・数値・絵・音などの「形式的なモノ」に変換するプロセスが重要である。とりわけ、教育実践は、実践者と対象者の言語的行為・非言語的行為が複合して展開される営みであるため、形式知から暗黙知への変換（破線）をも含めた双方向性が重要となる。そして、これらが循環することによって学びが深まっていく。

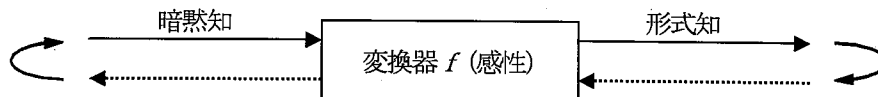


図2 教育実践における感性

このように、工学が規定しようとする人工感性と教育実践で捉えるべき感性との間には、共通点と相違点が存在するため、改めて教育実践の感性システムの構造化に取り組む必要があった。そのため、研究メンバーによるブレインストーミングを実施し、感性に関する相互の認識を集約し KJ 法を用いて分類作業を行った。その結果次のことが導出された。

- ①ある事象に個人が出会った時の情報の取り込み（インプット）とそれに対する反応（アウトプット）に関する位相があり、この「アウトプット」には、表出・外化されたそれのみに留まらず、内的に感得されたそれをも含むべきであること
- ②「個別性と共有性」に関する位相があること

③これらの位相とは別に、「価値判断・評価」といった問題が存在すること

この結果と先行研究とを照応し、下記のような3つの軸を抽出した。(A) (B)に関しては、感性工学領域の感性システムのフレームワークと一致したが、(C)に関しては、教育実践で重視したいオリジナルの軸である。

- (A) 「受け取る」感性と「生み出す」感性
- (B) 「共有・集団的な」感性と「個別的な」感性
- (C) 「表現される」感性と「表現されない」感性

1-b. 感性工学におけるフレームワークとの対比による、教育実践で重視すべき観点の明確化

これら抽出された軸を組み合わせ、図3に示す教育実践における感性のフレームワークを考案した。(C)の軸は、図2で示した暗黙知と形式知の往還を示すオリジナルの軸である。また、芸術領域では「感受的」には「鑑賞する」という意味合いが含まれるが、技術教育であれば「感受的」は「見抜く」に置き換えることができるなど、8象限という共通の枠の中で、それぞれの軸に対して各専門領域のキーワードに置き換える自由性を内在しているのが特徴である。理科や数学などの人を直接的な対象とはしない分野においても、感受的は「計測・観察」や「抽出・分析」、表現は「実証」や「証明」などといった概念に置き換えることも可能である。

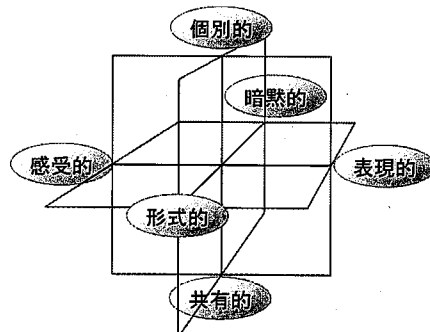


図3 教育実践における感性のフレームワーク (三重大学 COE (B) 2005)

【2. 感性の評価】

2-a. フレームワークのツールとしての有効性

開発したフレームワークは、実践場面でどのように感じる力が働いているかを可視化できるという利点をもっている。2005年度以降、下記のような実践現場の協働場面で様々なライフステージの対象者との実践において検討に用いた。

- \* 奈良女子大学附属小学校におけるアクションリサーチ
- \* 亀山市立白川小学校におけるアクションリサーチ
- \* 三重大学教育学部における「放課後の音楽室」の活動
- \* 三重県立一志病院の緩和病棟における音楽活動

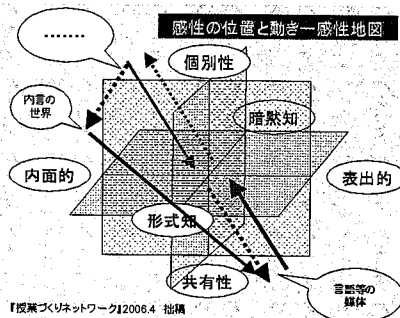


図4 感性のフレームワークの検討例

特に学校教育の場面では、①～④を可視化できる点で授業分析のツールとして、極めて有用性が高いことが検証された。

- ① 「出会い」を示す・・・感性の始源
- ② 「出会い」をより豊かにする支援の方法を明らかにする・・・身体知の共有、他者との対話
- ③ 形式知への変換の重要性を示す
- ④ 形式知どうしの連結による新たな形式知の創出・・・暗黙知

従来、言葉にならない感性は正当な位置づけを与えられてこなかったが、暗黙知から形式知への変換をいかにうながすか、そしてそれを暗黙知とどのように連結させるか、授業の本質である①から④へ、④から①へのベクトルの移動の過程を示すことができることを検証した(図4)。

このように実践現場でコミュニケーションツールとしての適用を試みた結果、フレームワーク上で示される矢印や象限の移動によって、「自分自身が外界とかかわりながら、内面とむかいあう過程」を示すことが可能であることがわかった。また、感性哲学における感性の定義「履歴を持つ空間で身体の配置を捉える力」という視座の重要性がわかった。これにより、教育実践では、身体性を大切にしなければならないことが再確認された。

2007年度に実践現場でのフレームワークの適用と有効性とをまとめた原著論文が日本感性工学会の審査で認められ、三重大学のオリジナルのアイデアとして発信することができた。感性工学の領域では、発達的な視点をふまえた検討が十分に進んでいないことから、学際領域および実践領域との協働を促進する役割を果たしたといえる。

## 2-b. 記録の蓄積

教育実践においては暗黙知と形式知の往還(Cの軸の往還)が重要であることが明らかになった。

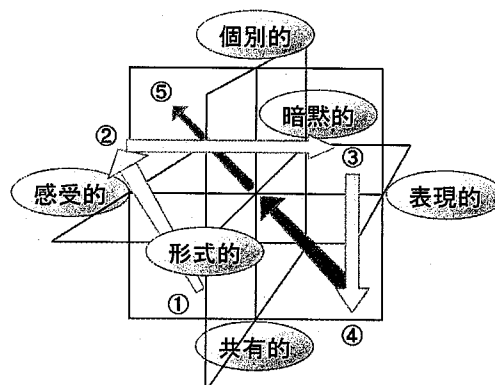


図5 省察における暗黙知と形式知の往還

これを、実践と省察の往還に適用してみる。

たとえば授業観察をする場合、同じ場面を参観しても(①共有的=暗黙的=感受的)、意識化される問題が異なる(②個別的=形式的=感受的)。ある学生は、教師と児童・生徒との関係性に着目し、ある学生は自分の立ち位置について困惑するかもしれない。意識化された問題を軸として記録(エピソード記述、ポートフォリオなど)を書き(③個別的=形式的=表現的)、ムードルに蓄積し、検討会や理論的な学びを通して、メンバーの知識や本質的な課題が共有される(④共有的=形式的=表現的)。特に重要なことは、共有された問題意識が、理論的な学習や検討会などでの意見交流によって内化され、新たな問題意識(⑤個別的=暗黙的=感受的)をもって実践現場に参加するという学びの連鎖である。

以上のプロセスを重視し、以下のような具体的な方法の開発・改善をすすめた。

#### (1) ポートフォリオ

日々の経験を簡単に振り返ることができるチェックリストを作成し、縦断的な変容を追った(資料1)。

また、学生のレポートを読み取る教員の暗黙知について検討した。その結果、概念の変容、態度の変容、多角的な視点の獲得、長所、短所の認識および長所の伸長と短所の補完への取り組み、専門技術の獲得・内省の態度の獲得、感性の言語化、子どもや保護者や自身の成長を正確に把握する視点などに類型化できることが明らかになり、「自己の客観化」と「価値の相対化」に焦点を当てて理論と省察の往還を支援していることがわかった。

#### (2) エピソード記述

実践現場で「感じたこと」に関する詳細な記述を基に、複数の記録を突き合わせて羅生門的接近を行い、参観者同士の記述や問題発見の相違に気付く場を設定した。特定の行動を切り出すのではなく、前後の文脈を含めて感じたことを記録するというエピソード記述の手法が、感性の生起条件などを読み解くための重要な手立てであることがわかった(資料2)。

#### (3) テキストマイニング

テキストマイニングとは、膨大なテキストデータの解析から得られた言葉の規則性を解釈し、テキスト提供者の意識を多角的に把握する技術である。本プロジェクトでは、学生が定期的に提出したレポート中の単語の共出現関係に基づいてキーワードマッピングを作成し、学生が現場において働かせる「感性」の可視化に挑戦した。また、中長期的にテキストデータを収集し、時系列に従ってデータ解析結果を比較することで、学生の体験の経過と発達的变化の検討が可能となった(資料3)。

#### (4) 相互反応のマイクロ分析

感じる力は、他者との相互作用の文脈の中で発揮される。個人の行動を切り出すのではなく、共同での相互作用そのものを捉えるための方法論として、相互反応のマイクロ分析を行い、どのように共同のプロセスの中で感じる力を発揮しているのかを可視化する方法を開発した(資料4)。

#### (5) 到達目標(スタンダード)

愛媛大学、秋田大学などとの交流によって明らかになった三重大学の固有性と、全国の教員養成大学における到達目標に関する先行研究を照合し、(1)～(4)であきらかになった視点を加えて、三重スタンダード(仮称)を作成した(資料5)。

### 2-c. 評価方法の開発

特に、「感じる力」を「問題発見能力」「動機づけ」という側面で捉え、客観的に評価するためのツールや方法を中心に開発を進めた。近年新しい教育評価法として注目されつつあるPA(Performance Assessment)を基に、現実問題解決場面において個人の心的プロセスそのものを評価することができる手法を開発し、経年的な変化をも念頭に置いた新しい評価システム Simulated Performance Assessment を試行した(資料6)。これによって、これまで定量的な評価が困難であった「感じる力」を、定性的な側面を利用しながら、量的な指標として測定することが可能となった。また、PAの中で用いられる評価規準(Rubric)の特徴として、量的な段階ごとに質的な行動が対応づけられるというものが挙げられるが、これによって感じる力の発達モデルを表現することが可能となった。すなわち、質的な行動が示された評価規準(Rubric)が存在することにより、現在の状態として評価された段階と次の段階の間の質的な行動の違いが明確化され、次なる行動目標が明らかとなる。これによって、「教育的支援と一体化した評価」が可能となった。

また、感性の一側面として、個人が課題に対して意欲を「感じる」過程である「動機づけ」に着目し、動機づけを精緻に捉える尺度(総合的動機づけ診断)を開発し、大学生の「動機づけ像」について検討を行った。また、これらのツールを用いて、大学生の動機づけの変化の様相についての検討も行っている。これらの研究成果は、全学的にも用いられ、学生の動機づけ変容の理解とその活用に活かされている(資料7)。

【3. 現場と協働する方法論】

3-a. 教育モデルとしての“アクションリサーチ的アプローチ”の可能性の明確化

学校現場だけでなく、教育に隣接する幅広い関連領域の現場との連携を学生の学びの場と捉え、教員養成型PBL教育のモデルを構築した。大学での学びも含め、教員養成型PBL教育の形態を、「現場との関係」と「事象の分類 (problem, project)」の関係により図6のように分類した。Iはproblem、IIはprojectである。現場としては、大きくは教育現場 (A) と地域・企業などの現場 (B) に区分し、事例研究型 (C) は大学の講義の中で行うことを想定している。

現場連携型PBL		事例研究型PBL
A-I 教育現場でのアクション・リサーチ	B-I 地域・企業 問題解決型	C
A-II プロジェクト活動型	B-II 製品開発型	

図6 教員養成型PBL教育の形態分類

教育学部における教育目標を鑑みた上で、self-directed learningを構築するためには、その学びを支援するための教育学部特有のシステムが必要である。そこで、学生・院生をチューターとして位置づけることによって、学生の自立的活動や自学自習を促進し、学生同士が「教え＝学ぶ」という教育学部の学生文化を育むことを企図した。チューターという概念は、一般的には、直接的・個人的な関係における指導者を指すが、本プロジェクトでは、チューターの役割を次のように規定した (図7)。

- ①自分なりの実践の見方と考え方や、事実への接近の方法論を持ち、事象を通して“新しい参加者”に伝える。
- ②場に臨みながら自分でポジションを取りつつ、“新しい参加者”の場を確保し関係性を形成する支援を行う。

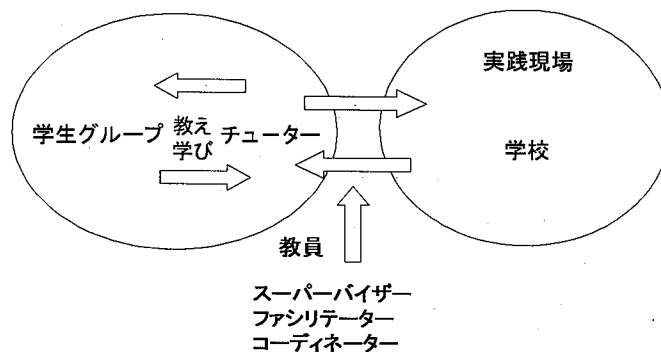


図7 チューターと教員の役割



3-b. 児童・生徒および大学生が「感じる力」を培うための教育モデル・システムの開発

図6に示した教員養成型PBL教育の分類にしたがって、開発した具体的な教育モデルについて説明する。

① 学習支援モデル (A-I、B-I)

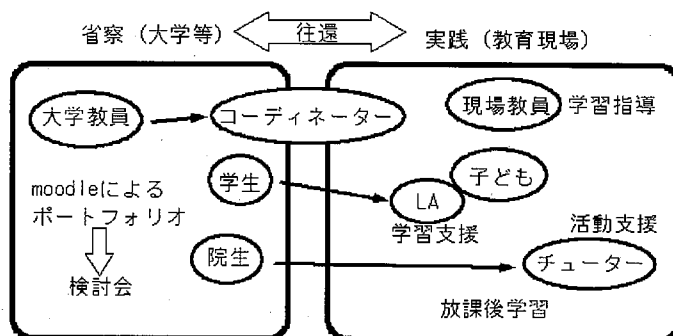


図8 学習支援モデル

このモデルでは、学生は教える立場としてではなく、LA: Learning Attendant (造語) として子ども達に寄り添い、子ども達の学びによる変化やつまづきなどを知る活動を行う。実践現場への入り方に対しては、LAの経験者であるチューターからのアドバイスにより、強い不安を感じることがないように配慮される。学生は、実践現場で気付いたことや疑問に思ったことなどを、moodle上のポートフォリオとして報告し、チューターや教員からコメントをもらいながら、理論的な学びへの動機づけを高めていく。このモデルの目標は、学生が子ども達の実態に触れる中で、自らの教育体験を相対化し、教えることの意義を理解することにある。大学生が寄り添うことで子ども達の学習意欲が高められるという効果が確認され、現場にとってもアクションリサーチ的な活動となっている。学生の評価は、チューターによるPA (Performance Assessment) を用いた評価法を開発し、試行した (資料8)。

② 学生開発型授業実践モデル (A-I、A-II、B-I)

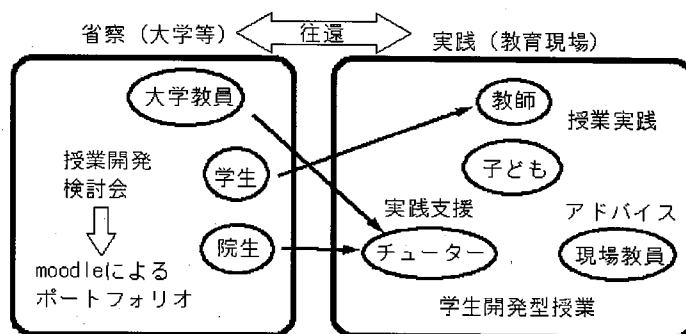


図9 学生開発型授業実践モデル

このモデルでは、教育実習を経験していない2年生が学校現場に入り、教師見習いをしながら自分たちで開発した授業を組み立て実践する。学生はチューターのアドバイスを受けながら、PBLによる検討会を繰り返し、授業案を組み立てていく。子ども達に伝えたい思いを授業案という形で具現化し、現実場面における子ども達の反応と想定との相違を通して、教育の意義や奥深さを感じることを大切にしている。授業案をめぐる学生とチューター・教員との検討結果は、ムードルを通して参加者に共有され、相互の学びを保証するとともに、最終案については、チューター・教員さらには実践校の現場教員によるチェックを受ける。すなわち、授業実践という一つのプロジェクトを掲げたPBL教育であり、学校現場においては、大学生による実験的な授業を受け入れることで、教師が実践者としてではなく観察者として子ども達の様子を見ることができ、学生チューターを交えた振り返りのなかで、アクションリサーチ的な取り組みとし

てとらえられる。実践後、学生は最終報告書を作成し、ポートフォリオとともに提出し、教員からの評価を受ける。

③ プラクティス・クラブモデル (A-I、A-II、B-I、C)

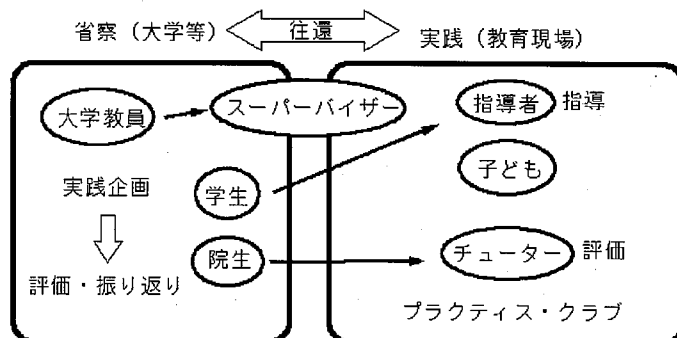


図10 プラクティス・クラブモデル

放課後や休日などを利用して、コミュニケーション力を培う活動など実験的な活動を展開するモデルである。学生は指導者としての立場で、目的を定めて子ども達の実態に合わせた活動を開発し実践する。チューターは活動の企画においてアドバイスをし、実践の場では活動全体を観察し、学生や子ども達の動きを記録する。得られた記録を基に振り返りを行う。このモデルでは、学校の授業現場ではなく休日等を利用しているため、現場教員が不在となる。したがって学生は、参加する子ども達を集めたり、学校や保護者を対象とした説明を行う等、場を設定するような活動も考えなければならないため、学校の位置づけや社会的な責任についても学ぶ機会を得る。評価については、PAを用いた実験的な試みを重ねている。

④ 参観・授業実践アクションリサーチモデル (A-I、A-II)

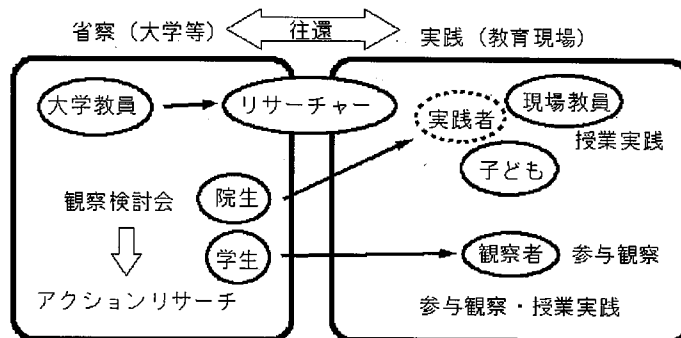


図11 参与観察・授業実践による教育モデル

このモデルでは、教育実習を終えた学生が学校の実践現場に入り、参与観察を行い授業記録をとるとともに、休み時間や学校行事での子ども達の様子なども記録する。大学に帰ってから、複数の学生の記録を突き合わせながら、大学教員を交えて検討会を行う。そこでは、現場で起こっている事象を発見し、理論的な考察を加えながら、現場教員へのフィードバックを提案する。さらに、現場教員を交えた合同検討会を企画・運営、授業記録の提出や問題提起を行う。現場教員にとっては、自らの実践の客観的な観察記録を得たり、届きにくい子ども達の声を受け取る機会としての意義がある。また、学生自身が実践者として現場に入り、実験的な授業を行うなど、総合的な学びが展開される。

⑤ 総合モデル (A-I、A-II、B-II、C)

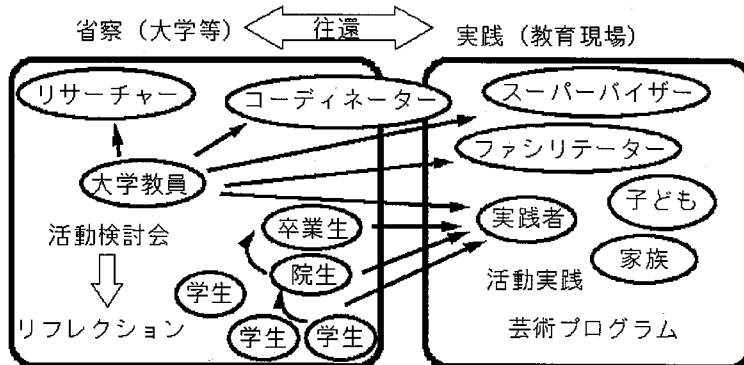


図12 総合モデル

Williams Syndrome (ウィリアムズ症候群) の患児と家族のための3泊4日の“芸術プログラム”がこのモデルに該当する。活動や教材を開発する、という視点に立てば、A-II型、B-II型に属するが、対象者のニーズを理解し、問題解決をするという視点では、A-I、B-II型に属する総合的なPBL教育である。授業や検討会では、事例検討も行うためCも重要である。

プログラム開発において重視していることは、下記の3点である。

- ① 子どもとその家族全員が参加する。
- ② 音楽、美術などの多領域を融合したプログラムにする。
- ③ 医学・福祉・心理などの近接関連領域との連携を図る。

企画・実践するメンバーは、学部2-4生から大学院生、卒業生・修了生であり、多領域・異年齢によるグループの学びあいの場が構築されている。

以上、教育実践における感性のフレームワークの提唱と、教員養成型PBL教育モデルの開発という、当初の目的は達成できたと考える。

② 研究活動から得られた新たな学術的知見

1940年代にLewin,Kによって提唱されたアクションリサーチに関する教育実践領域の先行研究が少ないのは、教育実践においては多様な変化因子が存在し、仮説検証が困難であることを確認した。その変化因子は、以下のように整理できる。

- ① 対象となる児童・生徒の発達や成長
- ② 観察者・実践者の成長
- ③ 変容する実践現場 (学校経営・学級経営・人事異動など)

そのような中でも、本プロジェクトでは、コミュニケーションや動機づけなどに着目することによって、現場での学生の変容を蓄積することができた。

実践現場における現実問題に対しては、「科学的理解」と「素朴理解」の2つの問題の理解の仕方があるが、それぞれには可能性と限界(あるいは危険性)もあり、一方に偏ることなく現実問題に向き合うためにも、教員、大学院生、学部生がチームを組んで、仮説を立てて現場に望むことがなによりも大切である。このこと自体が相互の「感じる力」を理解しあう機会にもなり、これがアクションリサーチ的アプローチの意義といえる。

アクションリサーチには、『原因追求型』と『解決指向型』の研究のスタイルがあるが、本プロジェクトで開発してきた教員養成型PBL教育モデルとしてのアクションリサーチにおいては、後者の重要性が改めて認識された。

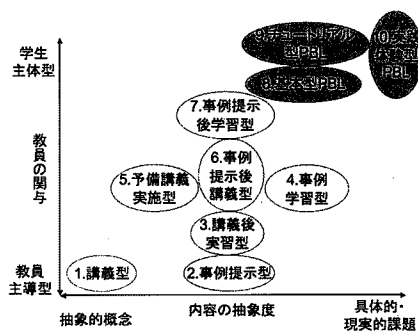


図 1 3 PBL の学習形態

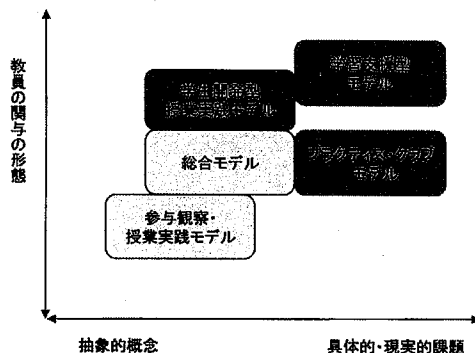


図 1 4 教員養成型 PBL の学習形態

また、教育モデルを開発することによって、教員養成型 PBL チュートリアル教育の特徴を明らかにすることができた。

図 1 3 は、PBL 教育の学習形態であるが、学生主体型と教員主体型に示される縦軸に関しては、教員の関与の度合いではなく、関与の形態の変化で示す方が特徴を明確にすることができる。前述した 5 つのモデルにおいても、コーディネーター、ファシリテーター、リサーチャー、スーパーバイザーなど活動によって教員の役割がかわっている。また、学生の自主性が高まれば高まるほど、教育の本質的な研究領域に近づくことになり、現場でのかかわりも本格的になるが、このことは、より深い経験をするためには専門的知識が必要となることを示唆するものである。これらの知見を踏まえ、本プロジェクトで開発した教育モデル（教員養成型 PBL）の学習形態をまとめ、図 1 4 に示す。これは、現在の教育学部のカリキュラム構造を改善するための根拠に成り得ると考える。

### ③ 構成員の有機的連携（連携が保たれ活発な研究活動が展開されたか）

本プロジェクトを立ち上げた段階では、教育学部において領域を超えた協働研究を推進する土壌は十分には形成されていない状態であった。学問領域やカリキュラム構成の関係など、学部の背負ってきた歴史の中で新たな研究を推進するにあたり、着任 1 年目の若手研究者 3 名を本プロジェクトのメンバーに加えて研究を推進したことで、自由な発想の研究グループを形成することができた。また、それぞれの専門領域の研究を、本プロジェクトに絡めながら推進させることで、若手研究者らが今後取り組むべき新たな複合領域にまたがる研究テーマを創出することができた。さらに、若手研究者及びチューター（大学院生）は、プロジェクト研究費を利用して多くの研究成果をあげることができた。その成果を秋田大学・愛媛大学・島根大学との合同シンポジウムや学会、研究会等で報告することにより、学年やコースを超えた学生同士の学び合いが展開し、それは連携した他大学へも広がっている。

構成員の連携の度合いを示すものとして、研究会の開催状況がある。平成 16 年度より開催した研究会は 96 回にもおよび、研究プロジェクト推進期間を通して、ほぼ毎月 2 回のペースで研究会が開催されたことになる。全ての研究会において、複数の専門領域の研究者が集い、複合的な視点から研究テーマの検討に取り組んだ。また、原則的に研究会を公開とし、学生や学部教員を初め、学校教員などの連携先関係者や他大学研究者など、本プロジェクトのメンバー以外が参加することが常であった。この点からも、構成員の有機的な連携だけでなく、学部や領域を超えた横断的な連携が計られ、研究成果の共有が積極的に行われたといえる。

研究プロジェクトにおける出張は 37 回実施された。研究メンバーの学会参加・講演発表が 18 回と最も多いが、その中で特記すべきは、メンバー個々の専門領域の学会に専門を異にする他のメンバーが参加・研究発表したものが 10 回を数えることである。これは横断的な研究が推進されその成果が公表されたという意義があるだけでなく、学会の活性化にも大いに貢献しているといえる。他には、実践現場とのシン

ポジウム・検討会開催が5回、他大学との合同シンポジウム開催が4回、さらには、芸術プログラムや実地研究・ワークショップ開催など、教育モデルの開発に直結する活動を4回にわたって行っている。

研究活動実績の①発表論文一覧にも示したが、法人化時点(2006年度)では、発表論文数は11件で、主にメンバーの個人研究が中心であった。COE(B)の活動が推進されるに従い、メンバーの論文発表件数が増加しているが(2005年度19件、2006年度21件、2007年度23件、2008年度17件)、特に特徴的なのは、COE(B)メンバー同士あるいはメンバー以外の研究者との共同研究が増加していることである。当初10名であったCOE(B)メンバーは、2006年に1名転出、2007年に1名死亡により8名となったが、教育学部構成員との共同研究も広がり、2007年度までに28名(教育学部全構成員の27%)がCOE(B)との研究に参画した。なお、現在のCOE(B)メンバーは12人であるが、当初から参加していた10名のメンバーのものに限定した。

研究活動実績の③シンポジウム等の開催状況にもあるように、学生との協働を重視し、他大学との交流を推進している点がCOE(B)の特徴である。国内の他大学との合同シンポジウム(2006年度2件、2007年度2件)を継続的に開催している。国外の大学(天津師範大学、ニューヨーク大学、釜山教育大学)との継続的な共同研究も行っている。

また、研究に関連して交付を受けた研究費に関しては、2004・2005年度のものは、COE(B)の基盤となる研究であり、2006年度以降のものに関しては、COE(B)により進展した研究成果を基に申請し認められたものである。採択数は教育学部全体の採択数の25%に当たり、金額では約20%を占める。学部構成員に対する研究メンバーの人数比が8%程であることを考慮すると、COE(B)の研究アクティビティの高さを示している。

#### ④ 学部のバックアップ体制

学部運営委員会からの研究室貸与により、研究成果の蓄積、資料の保存、閲覧が可能になった。学生との事例検討を常時開催することが可能になり、学生の学びを保証できるようになった。また、専用研究室における計算機の活用とmoodleを利用した資料・データの共有とにより、学生の個人情報や関係機関の機密情報の管理を徹底することが可能となった。

また、現代GPや学部長裁量経費研究等の学部内プロジェクトと連携をとりつつ研究を推進しており、合同研究会の開催や設備・備品の共有など、様々なレベルで共同研究を進めることができている。

一方、教育学部PBL教育実施委員会やFD委員会との連携も重要である。FD委員会主催の『教員と学生が語る会』におけるポスターセッション形式の研究交流会は、常に本プロジェクトとの共催として進められてきた。これらは、教育学部附属教育実践総合センターとの協同により、人文学部主催のアカデミックフェアにおけるポスターセッションや現代GPにおける一身田フォーラムに発展している。

#### ⑤ 経費(効率的・効果的に使用されたか)

研究推進・記録のための計算機等の設備備品費が17%、ソフトウェアや教材開発のための消耗品費が27%、先行研究の調査、活動・交流および学会発表のための旅費が34%、報告書等印刷費が6%、専門知識の提供等人件費が5%、図書費が5%、その他が6%である。設備備品費に偏ることなく、研究推進に必要な経費をバランス良く支出している。

学部の協力で研究室が貸与されたことにより、備品・消耗品を共同で使用することが可能となり、効率的な運用を進めてきた。他大学との合同シンポジウム開催などにおいては、学部の会議室等を学部負担で利用させてもらうことで、会議費等はほとんど発生していない。

旅費のウェイトが最も大きいですが、前述の通り、研究推進に当たり多くの連携先との協同を実現し、学生の現場での学びの場をつくり出すことができた。これらは参加者個人の経験として蓄積されただけでなく、連携先との信頼関係や協同意識など、本学の無形の資産として今後活かされるものとする。

## ⑥ 今後の展望

5年間にわたる研究の成果として、異なるレベルの学生や多様な現場での学びに合わせた教員養成型 PBL 教育のモデルを創出してきたが、これらのモデルの有効性を実証するためには、取組を継続的に発展させることが重要である。これまで研究メンバー個人の努力によって築き上げてきた教育実践現場との連携が、今後も安定して継続される必要があり、学生や担当教員が変わっても引き継がれるようなシステムを確立する必要がある。研究としての成果を、学部の教育に還元するためにも、連携推進の組織的な取組を促す必要があり、そのための方法論の開発や学生の学びを保证する環境整備など、今後の活動が重要となる。

本プロジェクトで明らかとなった課題は、PBL 教育に基づく教材開発や評価方法の開発などの科学研究費補助金による研究に発展させ継続して取り組む。また、研究で得られた成果を、現代 GP などの申請などに活用し、教育研究や地域連携への還元を目指す。

本プロジェクトにおける成果の検証および外部評価など一部の実施は、2009 年度に持ち越されるが、その研究推進の実施体制も整っている。①から③を 2009 年 3 月から 4 月に実施する。

- ① 学生の追跡調査
- ② 関連事業所・者による評価
- ③ 関連学会、研究会による評価

今後は、大学教育全体への適用の可能性について、他学部との協働により検討を継続的に進める。

## ⑦ その他特記事項（学内外に対しどのようなインパクト等を与えたか等）

日本感性工学会の大会（感性教育・感性哲学部会）において、感性教育や教材開発における教員の協働や学問の越境の必要性を報告した。その成果が認められ、2006 年 3 月に日本感性工学会感性哲学部会のシンポジウムを本プロジェクトが中心となって三重大学で開催した。また、2007 年度より、同部会の事務局として企画・運営に関わり、日本の感性哲学研究の一拠点としての役割を担っている。

平成 17 年度の教員養成プロジェクト採択校である秋田大学を視察し、そのプロジェクトの遂行プロセスと本研究の相違について、意見交換をした。その結果、本プロジェクトでは教育心理学、教育学上でも最先端の理論に基づいた活動であることを確認した。また、2005 年度より「大学教育フォーラム」において「教員養成型 PBL の課題と展望」と題した報告を継続しており、2008 年度は愛媛大学より指定討論者を招き、ラウンドテーブルを開催する予定である。これは、本プロジェクトに対する外部評価の一部となる。

本プロジェクトのひとつのモデルとして発展してきた芸術プログラムは、Williams Syndrome（ウィリアムズ症候群）の患児と家族を対象とした国内で唯一のキャンプ活動として注目されており、合衆国やアイルランド共和国における活動との継続的な連携を図ってきた。この活動を中心に、2007 年度に開催した公開シンポジウム『音楽の森』とそれに連続するワークショップでは、国内外の 100 名を超える関係者が集い、その内容は FM 東京の報道により全国に発信され、聴者からの大きな反響を得た。

## 研究活動実績

- ① 発表論文（平成16～20年度に発表した本研究に関連した論文の著者名、論文名、掲載誌、巻号、年月、頁等を記入）【別刷を添付すること】

【2004年度】

### 根津知佳子

教育実地研究の基盤としてのカリキュラム体験：『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』、三重大学共通教育センター、第12号、pp.59-67、(2004)

### 根津知佳子

音楽的場と「臨床の知」：『感性哲学4』、東信堂、pp.33-46、(2004)

### 根津知佳子

今、再び「臨床の知」を考える：『音楽心理学音楽療法研究年報』、日本音楽心理学音楽療法懇話会、第33巻、pp. 3-11、(2004)

### 根津知佳子・松本金矢・圓道衣舞・柳眸・下垣温子・吉田豊

手作り有音程打楽器の開発と音楽活動の実践～susceptibilityに焦点をあてて～：『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第56巻、pp.221-230、(2005)

### 森脇健夫

授業をつくる教師の知をめぐって：『確かな学力と指導法の探求』、日本教育方法学会編、図書文化、pp.121-131、(2004)

### 廣岡秀一・中西良文・横矢規・後藤淳子・福田真知

大学生のクリティカルシンキング志向性に関する縦断的検討(1)：『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第56巻、pp. 303-315、(2005)

### 廣岡秀一・中西良文・廣岡雅子・後藤淳子・横矢規・矢神祥代・福田真知

小学生のコミュニケーション力を高める教育実践－教育学部・教育学研究科教育心理学学生によるボランティアな取り組み－：『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第56巻、pp. 317-332、(2005)

### 廣岡秀一・中西良文・廣岡雅子・後藤淳子・横矢規・矢神祥代・福田真知

小学生のコミュニケーション力を高める教育実践(2)－教育学部・教育学研究科教育心理学学生によるボランティアな取り組み－：『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第25号、pp37-45、(2005)

### 松本金矢・山本尚登・館学・稲濱章誠

オーディオスピーカーの設計・製作・評価を題材にした工業科課題研究：『日本産業技術教育学会誌』、Vol.46、No.2、pp.55-59、(2004)

### 荒尾岳児

調性と機能と声からの解放について：『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第56巻、pp.77-95、(2005)

### 中西良文

成功/失敗の方略帰属が自己効力感に与える影響：『教育心理学研究』、Vol.52、pp.127-138、(2004)

【2005年度】

### 根津知佳子

“臨む力”“望む力”を培う体験・演習の系統性～『音楽療法演習』の取り組みを通して～：『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』、三重大学共通教育センター、第13号、pp.35-42、(2005)

### 根津知佳子

教育学部のFD活動を振り返る～『教員と学生が語る会』の誕生と課題～：『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』、三重大学共通教育センター、第13号、pp.25-33、(2005)

松本金矢・安部剛・根津知佳子・圓道衣舞・榊眸・下垣温子・大池真智子

アートプロジェクトの構築Ⅰ～アートとしての“モノ”～:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第57巻、pp.203-210、(2006)

根津知佳子・安部剛・圓道衣舞・榊眸・下垣温子・松本金矢・大池真智子

アートプロジェクトの構築Ⅱ～アートとしての“場”～:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第57巻、pp.211-222、(2006)

根津知佳子・下垣温子・榊眸・圓道衣舞・安部剛・松本金矢

実践複合体としての音楽的場～Williams Syndrome の芸術プログラムにおける『ホイサー』の事例から～:『音楽心理学音楽療法研究年報』、第34巻、pp. 23-30、(2006)

根津知佳子・森脇健夫・松本金矢

教員養成型 PBL 教育の課題と展望:『第12回大学教育研究フォーラム発表論文集』、京都大学高等教育研究開発推進センター、pp.50-51、(2006)

大谷正人

マーラーの交響曲第8番の志向する超越性～心理臨床からの視点も含めて～:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第57巻、pp.41-48、(2006)

森脇健夫・根津知佳子・松本金矢・佐藤広和・佐藤年明・岡野昇・西出弓枝・磯部由香

教育学部の「PBLチュートリアルトレーニング」としての「教育実践へのアクションリサーチ」の研究:『平成16年度三重大学教育学部学部長裁量経費研究(教育 COE 部門)研究報告書』、(2005)

松岡守

Introduction of Program Activity on Cooperative Education and Career Development at Faculty of Education, Mie University: 第1回タイ-三重大学国際シンポジウム、pp.61-76、(2005)

廣岡秀一・中西良文・廣岡雅子・横矢祥代・福田真知・秋山美和・伊藤由恵

小学校のコミュニケーション能力を高める教育実践(3)―活動2年目の取り組み―:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第57巻、pp.101-110、(2006)

廣岡秀一・横矢祥代

小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第57巻、pp.111-120、(2006)

廣岡秀一・横矢規・中西良文

大学生のクリティカルシンキング志向性と大学生生活経験:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第57巻、pp.121-133、(2006)

福田真知・廣岡秀一

初対面状況の違いがパーソナリティ認知に及ぼす効果:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第57巻、pp.135-143、(2006)

廣岡秀一・中西良文・廣岡雅子・横矢祥代・福田真知・秋山美和・伊藤由恵・小倉明子

小学校のコミュニケーション能力に対する Performance Assessment ―活動プログラム(Task)と評価基準(Rubric)作成の試み―:『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第26号、pp.25-33、(2006)

松本金矢・山田由紀子・岡田真人

技術教育の導入におけるPBLチュートリアル教育の試み:『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第26号、pp.73-76、(2006)

岡田珠江

心理カウンセリングにおける誘導覚醒夢法の有効性―Katathymes Imaginative Psychotherapie の治療技法から―:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第57巻、pp.145-152、(2006)



佐田和美・岡田珠江・福森眞由美・伏見洋子

保健室に来る子どもの心の支援に関する実践的研究～描画を用いたかわりを通して～:『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 26 号、pp.93-98、(2006)

西山修・片山美香・滝口圭子

幼児に対する母親の上位水準名命名に関する語用論的分析:『岡山県立大学短期大学部研究紀要』、岡山県立大学短期大学部、第 13 巻、pp.47-59、(2006)

中西良文・伊田勝憲

総合的動機づけ診断に関する探索的研究:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第 57 巻、pp.93-100、(2006)

中西良文・廣岡秀一・横矢祥代

動機づけと社会的クリティカルシンキングとの関連—大学生の「感じる力」と「考える力」—:『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 26 号、pp.57-66、(2006)

#### 【2006 年度】

根津知佳子・森脇健夫・松本金矢

教員養成型 PBL 教育の課題と展望～Moodle を使ったのチューター・学生の 自立的活動の支援を通して～:『京都大学高等教育研究』、京都大学高等教育研究開発推進センター、pp.27-39、(2006)

根津知佳子

語り出す身体:『感性哲学6』、東信堂、pp.3-20、(2006)

根津知佳子・森脇健夫・松本金矢

子どもたちの“感性”を可視化する:『感性哲学6』、東信堂、pp.108-199、(2006)

根津知佳子・森脇健夫・松本金矢・圓道衣舞・下垣温子・榊眸・安部剛

多様な関わりを包含する“輪ゴムの部屋”の創出:『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』、三重大学共通教育センター、第 14 号、pp.15-20、(2006)

根津知佳子・安部剛・圓道衣舞

Collage 制作過程に内包される多様な対話:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第 58 巻 pp.169-179、(2007)

根津知佳子・森脇健夫・松本金矢

教員養成型 PBL 教育の課題と展望 II :『第 13 回大学教育研究フォーラム発表論文集』、京都大学高等教育研究開発推進センター、pp.56-57、(2007)

森脇健夫・根津知佳子・松岡守・松本金矢

子どもたちの感性と力を可視化する試み I :『三重大学教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 27 号、pp.13-20、(2007)

根津知佳子・森脇健夫・松本金矢・松岡守

子どもたちの感性と力を可視化する試み II :『三重大学教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 27 号、pp.21-28、(2007)

根津知佳子・榊眸・下垣温子・馬淵晶子

緩和病棟の音楽療法における“new object”の役割:『日本音楽心理学音楽療法研究年報』、日本音楽心理学音楽療法懇話会、第 35 巻、pp.35-42、(2007)

橋本翠・小西賢三・根津知佳子

音楽のもつ療法効果に「好み」は関係するの～脳波帯域パワー値の変化から～:『日本音楽心理学音楽療法研究年報』、日本音楽心理学音楽療法懇話会、第 35 巻、pp.43-50、(2007)

大谷正人

発達障害児の音楽療法についての一考察—音楽学と発達臨床心理学の関連から—:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第 58 巻、pp.29-32、(2007)

森脇健夫

教室が「沸き立つ」瞬間:『授業づくりネットワーク』、学事出版、No.249、pp.7-9、(2006)

森脇健夫

学力問題の構造と学校改革—三重県下の取り組みを事例に—:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第 58 巻、pp.223-231、(2007)

村松浩幸・川崎直哉・山本利一・田口浩継・松岡 守・吉田昌春・杵淵 信・松浦正史・大橋和正・松永康弘・須見尚文

全日本中学校技術・家庭科研究会による中学生ロボットコンテスト全国大会参加生徒と教師の意識調査の報告:『日本産業技術教育学会誌』、第 48 巻、第1号、pp.59-64、(2006)

廣岡秀一・中西良文・廣岡雅子・横矢祥代・秋山美和・伊藤由恵・東由華

小学校のコミュニケーション能力に対する Performance Assessment(2) —活動プログラム(Task)と評価基準(Rubric)の開発—:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第 58 巻、pp.203-214、(2007)

廣岡秀一・森脇健夫・根津知佳子・松本金矢・中西良文

『パフォーマンスアセスメント(PA)実施マニュアル—小学生のコミュニケーション能力の評価を例に—』:三重大学教育学部PBL教育評価研究会発行、(2007)

磯部由香・中西康雅・松本金矢

『総合演習』におけるPBL教育の実践:『三重大学教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 27 号、pp.83-87、(2007)

岡田珠江・松本裕子

学級で心を育む「お絵かき遊び」(I)—手法の開発と試行—:『三重大学教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 27 号、pp.40-50、(2007)

佐田和美・岡田珠江・福森眞由美・伏見洋子

保健室に来る子どもの心の支援に関する実践的研究(II):『三重大学教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 27 号、pp.147-152、(2007)

松本裕子・佐田和美・中川敦子・岡田珠江

学級で心を育む「お絵かき遊び」(II)—手法の開発と試行—:『三重大学教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 27 号 pp.141-146、(2007)

寺田容子・滝口圭子・落合俊郎

小学校の通常学級の教員に対する特別支援教育に関する情報の供給の在り方:特別支援教育の情報源に対する需要の検討から『SNE ジャーナル』、日本特別ニーズ教育学会、第 12 巻、 pp.102-115、(2006)

【2007 年度】

根津知佳子

学びの空間を変えることによって掬い集められるコト・モノ:『感性哲学 7』、東信堂、pp.102-117、(2007)

根津知佳子

芸術プログラムの構造:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第 59 巻、pp.269-275、(2008)

根津知佳子・森脇健夫・松本金矢

教員養成型 PBL 教育の課題と展望Ⅲ:『第 14 回大学教育研究フォーラム発表論文集』、京都大学高等教育研究開発推進センター、pp.50-51、(2008)

根津知佳子・森脇健夫

“感じる力”を培う教育実地研究:『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』、三重大学共通教育センター、第 16 号、pp.21-25、(2008)

森脇健夫・根津知佳子・南田修司・倉田真由美・日下瑤子・小那覇和歌子・渡邊隆史・時愛新  
小規模特認校におけるアクションリサーチ的試み I :『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 28 号、pp.13-17、(2008)

根津知佳子・森脇健夫・南田修司・倉田真由美・日下瑤子・小那覇和歌子・時愛新  
小規模特認校におけるアクションリサーチ的試み I :『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 28 号、pp.19-26、(2008)

森脇健夫

「自分ならどう行動していくか」を考えるテキストの条件:『社会科教育』、No.581、明治図書、pp.34-35、(2007)

森脇健夫

教師の力量としての授業スタイルとその形成:『学びのための教師論』、グループ・ディダクティカ編、勁草書房、pp.167-192、(2007)

森脇健夫・小幡肇

授業研究としての「アクションリサーチ」の試み—小幡肇氏(奈良女子大学附属小学校)との協働による授業研究—:『三重大学教育学部研究紀要』、三重大学教育学部、第 59 卷、pp.299-309、(2008)

松岡守

中国における大学生向けアイデアコンテスト『挑戦杯』:『平成 18 年度三重大学国際交流センター紀要』、三重大学国際交流センター、pp.101-111、(2007)

**Mamoru Matsuoka, Haruhiko Okumura, Tomosumi Sasaki, Hiroshi Shimamura, Tsutomu Shimomura, Takaharu Kameoka**

“Global Environmental Education using Squeak and Field Servers”, in the proceedings of the Fifth International Conference on Creating, Connecting and Collaborating through Computing、(2007)

松岡 守

平成19年度特許庁大学知財研究推進事業『初等・中等教育における知財教育手法の研究報告書』:三重大学教育学部、(2008)

朴 恵淑・松岡 守

『エネルギー環境教育成果報告書』、三重大学・中部電力、(2008)

廣岡秀一・森脇健夫・根津知佳子・松本金矢

PBL 教育を媒介とした「現場」と「大学の往還関係の構築と評価システムの開発」:『日本教育大学協会研究年報』、日本教育大学協会、第 26 集、pp.183-196、(2008)

廣岡秀一・中西良文・秋山美和・横矢祥代・伊藤由恵・東 由華・廣岡雅子

小学生のコミュニケーション能力を高めるための実践活動が教育学部の学生にもたらす発達の変化— わくわくコミュニケーションクラブの実践を通して — 『三重大学教育学部紀要』、三重大学教育学部、第 59 卷、pp.277-289、(2008)

松本金矢・奥田博子・日下瑤子・根津知佳子

音の体験における子ども達の「感じる力」—自由な発想を促す空間『音の館』の創出—:『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 28 号、pp.47-52、(2008)

岡田珠江

教育心理臨床における個別化と一般化(酒木保編):『人間科学における個別性と一般性』、ナカニシヤ出版、pp101-112、(2007)

岡田珠江

子ども理解のあり方:国立大学教育実践関連センター協議会教育臨床部門編、『学校カウンセリング入門』、東洋館出版社、pp32-35、(2007)

**Tamae Okada**

The Change of the Image and the behaviors of Children during Art Therapy at Schools in Japan,  
“Grenzüberschreitungen” Bewusstseinswandel und Gesundheitshandeln (R. Hampe, Peter B. Stalder Hg, als  
Vertreter des Vorstandes der IGKGT/IAACT), Frank&Timme GmbH Verlag für Wissenschaftliche Literatur  
Berlin, P475-486, 2008

山上克俊・岡田珠江

学級集団の中で心を育む「遊び」の試行—「言葉遊び(冠付け)」と「お絵かき遊び」を通して—:『三重大学  
教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 28 号、  
pp.83-90、(2008)

滝口圭子

附属幼稚園での継続的な観察の意味を探る:学生は何を感じ、何を考えたのか:『三重大学教育学部附属  
教育実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 28 号、pp.33-38、(2008)

中西良文

-PBLによる教育改善-(話題提供) 日本心理学会第 71 回大会 ワークショップ(企画者:宇田光)大学教育  
の改革(1) -学生の動機づけを高める、(2007)

中西良文・村松浩幸・松岡守・奥村元美・吉岡利浩

合宿型ロボット製作における中学生のコミュニケーション力の変容 - パフォーマンスアセスメントによる  
評価を用いて -:『三重大学教育学部紀要』、三重大学教育学部、第 59 巻、pp.261-268、(2008)

【2008 年度】

根津知佳子・松本金矢

教育実践における感性のフレームワーク:『日本感性工学会論文誌』、日本感性工学会、Vol.8、No.1、  
pp.73-80、(2008)

根津知佳子・前原裕樹・松本金矢・中西良文

学生開発型のものづくり授業実践における「対話」の研究:『三重大学教育学部附属教育実践総合センタ  
ー紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第 29 号、印刷中、(2009)

根津知佳子

小学校音楽科の指導内容(4)身体表現:『小学校課程のための教科教育法音楽編』、教育芸術社、第1部  
IVの3の(4)、pp.53-54、(2008)

根津知佳子

心と音楽 こころの鏡:『音楽文化の創造』「心と音楽」、音楽文化創造、pp.16-19、(2008)

森脇健夫・根津知佳子・小幡肇

授業研究としての「アクションリサーチ」の試み II :『三重大学教育学部紀要』、三重大学教育学部、第 60  
巻、印刷中、(2009)

康 鳳麗・森脇健夫・坂本勝信

中国人日本語教師の授業スタイルの形成としての力量形成:『鈴鹿医療科学大学紀要』、第 15 号、  
pp.19-27、(2008)

森脇健夫

書評「近代化のフィールドワーク—断片化する世界で等身大で生きる」:『感性哲学 8』、東信堂、  
pp.126-127、(2008)

松岡 守

「知的財産立国」実現に向けた初等・中等教育における知財教育手法の開発:OHM、5月号、pp.10-11、  
(2008)

王 東屏・村松浩幸・松岡 守・渥美勇輝・勝浦莉津子・吉岡利浩・土谷明匡・甲斐麻純・Meneses Perez DANIEL

中国天津地区の中学校における知財教育プログラムの実践:『技術・職業教育学研究室 研究報告』技術教育学の探求:名古屋大学大学院教育発達科学研究科、技術・職業教育学研究室第5号、pp.131-136、(2008)

Mamoru Matsuoka

Development of IP Education Curriculum Using an Approach of Action Research : in the Proceedings of the Second International Symposium for “Industrial Technology Education”, Kariya, July 4-6, 2008.

Tamae Okada

Fostering of the psyche within the Homeroom: Picture Drawing Pley KunstReiz Neurobiologische Aspekte künstlerischer Therapien(R. Hampe, P.Martius,D.Ritschl, F.Spreti.P.B.Stalder Hg, IGKGT/IAACT), Frank&Timme GmbH Verlag für Wissenschaftliche Literatur Berlin P493-506, 2009

松本裕子・岡田珠江・春川真希・川瀬梓

学級で心を育む「お絵かき遊び」(Ⅲ)—特別な支援を要する子どもへの活用—:『三重大学教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第29号、印刷中、(2009)

佐田和美・岡田珠江・新谷りつ子

学級で心を育む「お絵かき遊び」(Ⅳ)—養護教諭による試行の実際—:『三重大学教育学部附属実践総合センター紀要』、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、第29号、印刷中、(2009)

滝口圭子・河崎道夫・北谷正子

子育て交流保育コアプロジェクト:教員養成カリキュラムの充実及び子育ての地域的共同の実践的構成を追究する共同研究、『日本教育大学協会研究年報』、日本教育大学協会、Vol.26、pp.59-70、(2008)

寺田容子・滝口圭子・武澤友広・落合俊郎

特別支援教育のハンドブックの使いやすさを高める要因とその充足の効果の検討 通常の学級での特別支援教育の充実に向け:『LD研究』、Vol.17、第2号、pp.191-200、(2008)

寺田容子・ソルト(仮名)・滝口圭子・くま(仮名)・宮本昌子

当事者との対話から考える、就労を見据えた教育のあり方:日本LD学会第17回大会自主シンポジウム(企画者:寺田容子)、p.219、(2008)

伊藤由恵・中西良文・根津知佳子・松本金矢

教育学部学生が実地研究において学生開発型授業を実践することの効果 —ポートフォリオ分析を中心とした学生の変化に注目して—:『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-16』、三重大学共通教育センター、pp.27-31、(2008)

② 著書(平成16~20年度に発表した本研究に関連した著書の著者名、著書名、出版社名等を記入)

根津知佳子

編集、『感性哲学6』、『感性哲学7』、『感性哲学8』、日本感性工学会感性哲学部会、(2006~2008)

岡田珠江

DVD 教材制作、教師教育用学習素材コンテンツ『教師の力量アップをめざして 臨床編』、制作担当(共同、今田里佳、松井賢二他)監修国立大学教育実践研究関連センター協議会、制作・著作:独立行政法人メディア教育開発センター、(2005)

描画を活かした教師のためのカウンセリング入門、岡田珠江、明治図書、(2006)

滝口圭子

石垣恵美子・北川明編著、瀧川光治・山内紀幸・出川聖尚子・三橋謙一郎・木村智子・滝口圭子・上田敏丈・中坪史典・小栗正裕・岡林典子著:『はじめて学ぶ幼児教育 Q&A+アドバイス』、ミネルヴァ書

房(第7章「幼児教育・保育の内容・方法」担当)、(2005)

寺田容子・今塩屋優美・滝口圭子・落合俊郎著:『LD, ADHD, 高機能自閉症等の子どものための指導教材集 第1集』(第2章「小学校移行支援ワークブック」、第3章「中学校移行支援ワークブック」担当)、LD学会編、明治図書、(2007)

#### 中西良文

学生ボランティアによる個別学習アシスト教室の実践 市川千秋(監修) 宇田光・山口豊一・西口利文(編)、『学校心理学入門シリーズ②』、授業改革の方法、ナカニシヤ出版、pp.97-115、(2007)

#### 松岡 守

DVD教材製作、勝浦莉津子、村松浩幸、松岡 守、『知財に Try!』、山崎教材、(2008)

### ③ 国際あるいは国内会議・シンポジウム等の開催状況(会議等の名称、開催時期・場所、参加人数、招待講演者等を記入)

- ・日本感性工学会 FD フォーラム 2005「感性工学教育の実践」  
2005年9月9日、青山学院大学、50名、池田輝政、名古屋工業大学と宇都宮大学と三重大学の共催
- ・秋田大学と三重大学の学生による交流「現場での学びを考える Vol.1」  
2005年12月4日、秋田大学、40名、姫野完治
- ・第1回教育実践における「感性」を考えるシンポジウム  
2006年1月23日、奈良女子大学附属小学校、40名、梶田萬理子、小幡肇、杉澤学
- ・公開研究会:「ロボコンの教育的な意味を巡って」  
2006年2月25日、三重大学、50名(現代GPと共催)
- ・日本感性工学会 感性哲学部会シンポジウム「語りだす身体」  
2006年3月25日-26日、三重大学、40名、桑子敏夫、佐々木葉二、佐々木能章、千代章一郎
- ・第2回教育実践における「感性」を考えるシンポジウム  
2007年2月23日、奈良女子大学附属小学校、20名、小幡肇、杉澤学
- ・島根大学・三重大学・愛媛大学のジョイント・シンポジウム  
2007年12月1日、愛媛大学、100名、白松賢
- ・山口大学・三重大学 合同 知財教育公開セミナー(東京会場)  
2008年2月22日、キャンパスイノベーションセンター東京、60名
- ・三重大学 知財教育公開セミナー(三重会場)  
2008年2月23日、三重大学、40名
- ・WS シンポジウム「音楽の森」  
2008年3月2日、順天堂大学、80名、Terry Monkaba、Ben Monkaba、吉澤一弥
- ・WS ワークショップ  
2008年3月3日、こどもの城・FM 東京、100名、Terry Monkaba、Ben Monkaba、吉澤一弥
- ・第3回教育実践における「感性」を考えるシンポジウム  
2008年3月4日、奈良女子大学附属小学校、20名、小幡肇、杉澤学
- ・エネルギー環境教育に関する成果報告会  
2008年3月15日、三重大学、40名
- ・第4回教育実践における「感性」を考えるシンポジウム会  
2008年10月21日、奈良女子大学附属小学校、30名、小幡肇、杉澤学
- ・全国不登校研究会 不登校シンポジウム  
2008年10月26日、三重大学、参加人数53名、小野昌彦、森川泉、石山佳秀、山川中、濱口拓

・KEIA(Korean Educational Idea Association) 2009 International Conference

2009年2月21日、釜山教育大学、森脇健夫

・エネルギー環境教育に関する成果報告会(予定)

2009年3月22日、三重大学

④ 特許出願状況等（当該研究から生まれた出願特許の発明者、名称、出願時期、技術移転状況等を記入）

⑤ 新聞報道等（当該研究から生まれた成果に関する新聞・放送報道等のタイトル、日時、報道メディア等を記入）

根津知佳子

・「研究室発 心に与える作用を研究」、2004年8月24日、中日新聞朝刊

・「もうひとつのおもちゃ箱」、2004年10月『Theミュージックセラピー』、第5巻、pp.42-43、音楽之友社

・「地域における音楽活動」、2005年9月27日、FM三重、Evening Cube

・「音楽の森」、2008年3月17日、東京FM BIBLE

・「特別な感受性を持っているウィリアムズの子どもたち」、2008年4月28日、東京FM オープンセサミ ブランニューアイ

・Worldwide Collaboration Can Provide Greater Support for Everyone: Williams Syndrome Association: WSA Heart to Heart, April 2008, Page 3 - 4

松岡守

・「ソーラーカーレース鈴鹿 M・E・Tにアイデア賞」、2005年8月9日、読売新聞朝刊

・「完成ロボットの性能、独創性競う」、2005年8月15日、中日新聞朝刊

・「ロボフェスタ2005 in 愛・地球博」、サイエンスチャンネル、2005年製作

廣岡秀一

・「気持ちの上手な伝え方を学ぶ—三重大学の先生らが考案—」、2004年9月23日、朝日小学生新聞

岡田珠江

・第37回日本芸術療法学会一般演題「学校カウンセリングとしての絵画療法の試み」、2005年8月25日、教育医事新聞 p.19

・「主体的な遊びでこころを育てる子どものカウンセリング」、2008年3月1日、三重大X、Vol.13

・「不登校者に学ぶ場を」、2008年10月27日、中日新聞朝刊

松本金矢

・「JR事故は複合要因か」、2005年4月30日、中日新聞朝刊

・「JR事故を考える」、2005年5月10日、三重テレビ、ワイドニュース

・「ものづくりの集大成、N700系が走る!」、2007年6月1日、三重大X、Vol.10

・「N700系に最適設計採用」、2007年8月1日、読売新聞朝刊